

これまでの審議経過

1. 第1回環境審議会

(1) 議事

① 諮問

新たな課題への対応を踏まえた「豊島区環境基本計画」見直しの方向性について

② 見直しにあたっての課題

- ・ 地域で取り組むことができ、かつ努力の結果が見える温暖化対策・エネルギー対策の検討。
- ・ 生物多様性の保全に関する視点を新たに加え、豊島区の生物多様性地域戦略として位置づける。

(2) 主なご意見

[計画について]

- CO₂排出量は外的要因に左右されるため、電力消費量など地域の努力の成果が反映できる指標を設定するとよい。
- 生物多様性地域戦略の観点として次のことが考えられる。
 1. モニタリングシステムをどう考えるか。
 2. エコロジカルネットワークをどう形成するか。
 3. 都市開発のなかでどのように生物多様性を取り入れるか。(評価システムなどを活用する。)
 4. 生態系サービス、緑のめぐみなどをどうやって広めていくか。
- 豊島区ならではの環境を生かした環境教育活動を展開していく必要がある。

[具体的な施策等について]

- ツイッターなどのソーシャルネットワーキングサービスを活用した情報発信をする
- 過去に実施していた、かんきょう観察員の報告などを活用するとよい。
- 豊島区でも、ちょっとした水辺や緑のあるところに鳥や虫などの生き物がある。そのような場所も調べるとよい。

2. 第2回環境審議会

(1) 議事

① 豊島区環境基本計画の進捗評価

各分野の指標数と進捗評価

	分野	指標数	進捗評価
1	低炭素地域社会の実現	6	B
2	環境まちづくり	5	A
3	ごみの減量と循環型社会の実現に向けて	3	B
4	環境の保全に関する取組み	2	B
5	豊島区の環境配慮率先行動	5	A

※各分野の指標は、豊島区基本計画及び未来戦略推進プランに基づき設定。

② 見直しに向けた論点

- ・ 取組の成果を把握できる指標の設定
- ・ 計画の着実な推進に向けた具体的施策
- ・ 多様な主体が気軽に参加できるしくみづくり

(2) 主なご意見

[計画について]

- CO₂排出量を示す際には、排出係数やエネルギー使用量を同時に示して、区民の誤解をまねかないようにするとよい。
- 環境学習や環境活動の拠点があるとよい。新庁舎などよいのではないか。

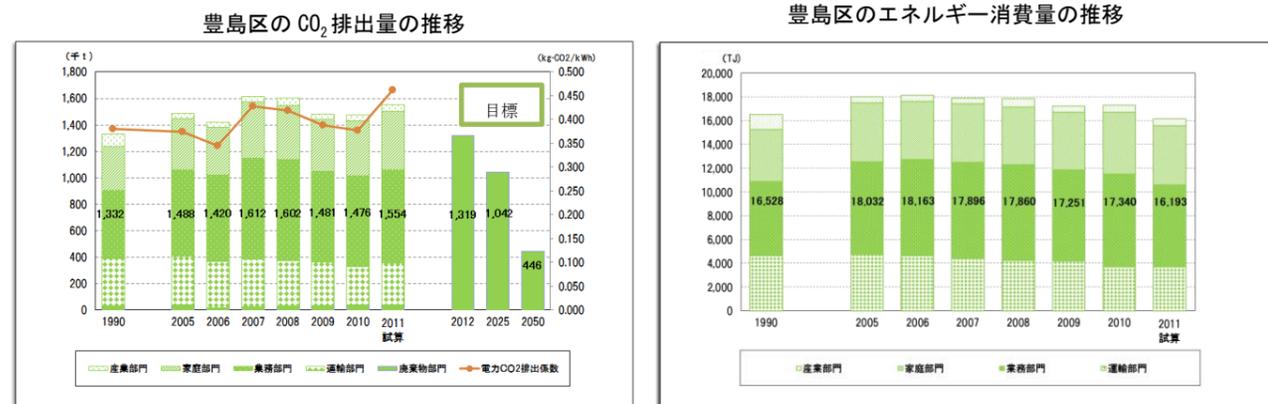
[具体的な施策等について]

- 空調を個別からセントラル方式へ変更する、あるいは複数のビルでエネルギーを面的に利用すると効率があがる。
- 家庭用の助成制度のバリエーションを増やすとよい。
- 校庭芝生化は緑化とはいえないのではないか。様々な弊害もあるので、今後どうしていくか考えていく必要がある。

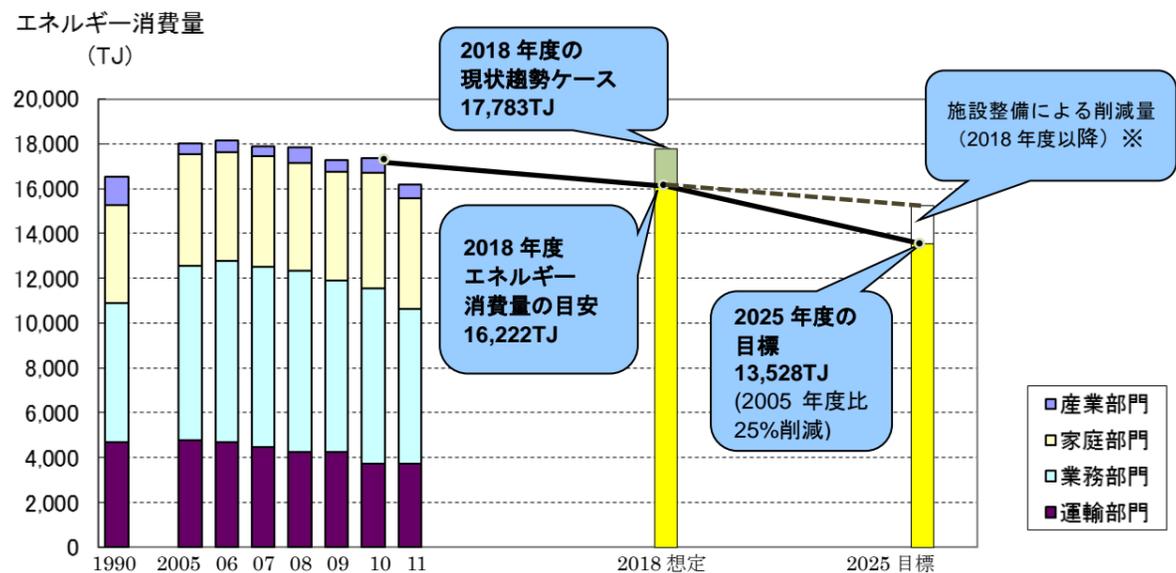
3. 第3回環境審議会

(1) 議事

①豊島区のCO₂排出の現状と削減目標の考え方



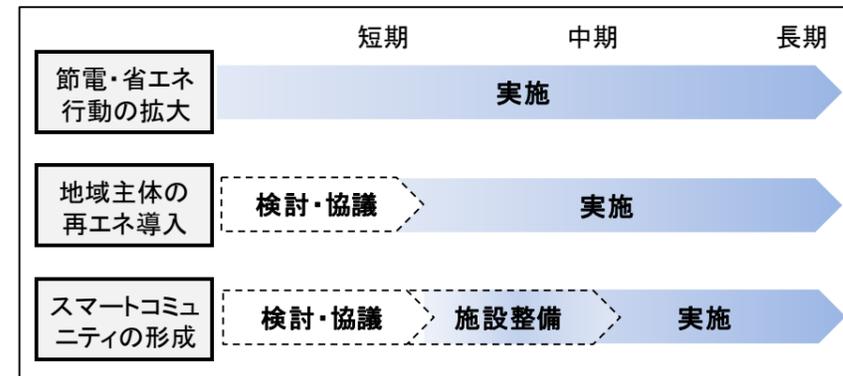
エネルギー消費量の2018年度の目安



※施設整備による削減量は、地域冷暖房供給エリアの拡大や豊島清掃工場廃熱利用、新公共交通システムの導入等の長期的対策を見込んだ数値である。

- 現時点では、CO₂削減目標の見直しは行わない。
- 後期計画期間では、中期目標(2025年度)に向けた取組みを着実に進めるため、計画終了年度(2018年度)におけるエネルギー消費量の目安を示す。

②達成に向けた施策(今後の施策展開に向けた新たな視点)



(2) 主なご意見

[計画について]

- CO₂排出量について、努力をして減った分と外的な要因でさらに減らさなければならぬ分をわかりやすく示す必要がある。
- 将来推計の際には、想定とセットで説明しないと誤解を招く。
- 区、国、都、区民、エネルギー供給会社、ステークホルダーそれぞれが何をすればいいか明確にしておくことが必要である。
- 省エネ技術により延床面積あたりのエネルギー消費量を減らしていくことも盛り込んでいくべき。
- 再エネの導入について、いつまでにどれくらい導入するか数値で出した方がよい。
- 広報は相手に伝わらないと意味がない。対象者別にする等、池袋という多くの人が集まる点を活用するとよい。

[具体的な施策等について]

- 施設整備による削減をできるだけ前倒しで実施するべき。
- 老朽建築物の建替えは、基準に合わせるだけでなく、よりよい環境性能、省エネ性能を推進していくべき。環境評価制度などを活用するとよい。また、高ランクのものにはインセンティブを与えていくとよい。
- 防災の観点より分散型エネルギーの導入を推進するべき。
- 給湯関係の省エネ設備の導入も例示で加えたほうがよい。
- エネファームのような燃料電池や、業務用のコジェネを増やすべき。
- 燃料電池自動車、電気自動車も検討するとよい。
- 市民参加型の再エネ導入手法を推進するとよい。他の自治体でも事例がある。
- 市民共同発電所などは区がよびかけるだけでなく、地域のグループが自主的にできるとよい。
- 電気の検針票にのっている削減率などを、個人がもっと意識するだけで削減につながる。
- 快適性には個人差、地域差があるので、快適性を損なわないようにというのを、どう設定するか難しい。

4. 第4回環境審議会

(1) 議事

生物多様性の保全について

2050年度の将来像(案)

- 高密な都市空間においても、身近にみどりや生きものとふれあえる空間が点在し、ネットワークを形成している。
- 生物多様性について知り、考え、行動する人の環が広がっている。
- 地域のあらゆる主体が参加できる、持続可能なしくみが構築されている。

施
策
の
方
向
(案)

(1) 生きものの生息地としてのみどりと水の保全・創出

(2) みどりと水と生きもののネットワーク(エコロジカルネットワーク)づくり

(3) 生物多様性についての普及啓発

(4) 生物多様性の情報収集・発信・共有

(5) 多様な主体の連携による持続可能なしくみづくり

(2) 主な意見

[計画について]

- いつ、どこで、誰が、何を、どのようにするかを明確にするべき。
- 豊島区で取り組む意義について、なぜ必要なのか、行動していかねばならないのかをわかりやすく表現するべき。
- 2050年の将来像について、区民の生活がどうなっているのか、もうちょっと夢のあるものを書き込んでもよいのではないか。
- 具体的な施策について、配置の部分と質の部分が混在しているので整理が必要である。
- 推進体制について、モニタリングをどうするか、PDCAサイクルについて書き込みが必要である。
- ガイドラインや行動指針のようなものがあるとよい。
- イメージ図について、いつ時点の何の図なのか、計画図なのかイメージ図なのかを明確にしたほうがよい。
- 池袋地区と長崎地区では土地の利用状況が違ってくるので、それぞれの特性に合わせた取り組みが必要である。
- 寺社の緑地は多いので、緑被率に占める割合を示すと、貢献していることが明確になってよい。

[具体的な施策等について]

- 緑化助成によっても質の向上を目指すべき。助成率を上げるなどして固有種を推進していくとよい。
- 何も無いところにビオトープをつくるよりも、谷端川、千川上水など、もともと水辺であったところを活用していくとよい。
- 水生生物の生態等の環境授業に長年携わっているが、子どもが生き物に接することは、命の大切さを学ぶこともでき、大切だと思う。
- 学校農園など作るだけで維持管理がきちんとできていない。地域の力、誰かが継続して見ていく力が必要。
- ビオトープをつくる際も、目的(主たる生き物)や外来生物を入れたらだめというようなルールを明確にする必要がある。
- いろいろなところでいろいろな事例があるので、それらを共有できる仕組みがあるとよい。
- 点在させるよりも、大きな緑地を作ったほうが効果があるのではないか。
- 新庁舎で小学校の環境教育もよいが、地域団体が活動する場や区民向けの環境教育をする場にもできたらよい。(例: あんさんぶる荻窪)